

## 【研究論文】

# 自主審査権獲得後の国立大学長選考（その2）

## 岐阜大学2代学長吉井義次の事例

廣内 大輔

岐阜大学教育推進・学生支援機構

### 要旨

岐阜大学2代学長の選考過程では、選出された学長候補者の就任が3度頓挫したため、都合4度の選挙が行われた。夫々、選出された人物は、高木市之助、武田憲治、佐藤正典、そして吉井義次であった。この間、学長不在の状態は1年近く続いた。2代学長に当選した吉井は、最初の意向投票では最下位にいた人物であった。選挙を繰り返すことになった一因は、学長予備候補者当人に事前に学長就任について意思を問うことなく選挙を進めていくという方法にあった。

キーワード：学長選考，岐阜大学，国立大学長，吉井義次

### 1. 課題設定

新制国立大学が昭和28年度に完成年度を迎え、学長選考について自主審査権を得たことと、それに伴って規程制定の動きが生じたことについては、本論文の上編である別稿「自主審査権獲得後の国立大学長選考（その1）：全国的動向と岐阜大学における規程制定」<sup>1</sup>で述べた。

しかし、制定された規程に則って選挙を実施した後、それがどのような結果を生み、あるいは何等かの課題が露呈したかどうかは定かでない。また、具体的に票がどのような動きを示したのかということも研究関心を惹きつけるところである。

そこで本稿では、岐阜大学2代学長選考を例に採り、選挙の流れと投票結果を一次史料から発掘して紹介するとともに同大学の規程の妥当性を検証する。

依拠する主な史料群は、『岐阜大学学報』のほか、『昭和二十七年四月 学長選挙関係書類 庶務課』と『昭和二十九年九月 学長選挙関係書類 庶務課』（いずれも岐阜大学所蔵）である。

## 2. 岐阜大学2代学長の選考過程

当時の岐阜大学の学長選考は図1に示す手順によって執り行われた。

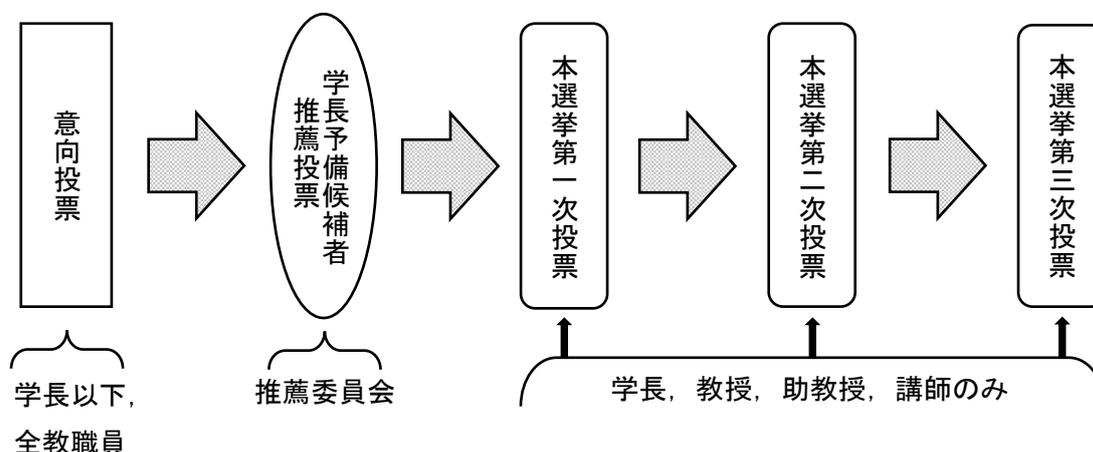


図1 岐阜大学2代学長の選考プロセス（投票の段階と選挙権者）

### 繰り返された学長選考の概略

岐阜大学2代学長の選考は、初代学長であった青木文一郎の没後、昭和29年10月から翌30年5月にかけて行われた。最終的に吉井義次が2代学長に就任するまでの間に幾度も選挙が行われており、その経緯は複雑である。そこで以後の理解を容易にするため、各選挙で選ばれた学長候補者の氏名や本稿で用いる各選挙の呼称等について、表1に示す。

表1 岐阜大学2代学長選考の概略

意向・推薦投票	選挙の呼称	選出された学長候補者	結論
第一回目	第1回選挙	高木市之助（愛知県立女子短期大学・学長）	候補者が辞退
	第2回選挙	武田憲治（千葉大学・園芸学部長）	候補者が辞退
	第3回選挙	佐藤正典（大阪府工業奨励館・館長）	就任実現せず
第二回目	仕切り直し選挙	吉井義次（東北大学・名誉教授）	2代学長就任

### 3. 第1回選挙：高木市之助を選出

本選挙に先立ち、まずは昭和29年10月7日に専任職員<sup>2</sup>による意向投票が行われた。これを第一回目の意向投票と呼ぶ。その結果を表2に示す。リストアップされた人物は、松久義平（42票）を筆頭に総勢51名であった<sup>3</sup>。

この51名の中から、推薦委員会によって本選挙の投票対象となる10名の学長予備候補者（以下、予備候補者）が、図2の左側に示すとおり選ばれている。これが第一回目の推薦投票であり、これによって選ばれた10名を以後、「元のリスト」（図2左側灰色部分）と呼ぶ。

表2 第一回目の意向投票（昭和29年10月7日実施）の結果

順位	氏名	得票数	順位	氏名	得票数	順位	氏名	得票数
1位	松久義平	42	18位	内海保次	3	29位	長田新	1
2位	近藤金助	18	18位	岡村精次	3	29位	各務虎雄	1
2位	高橋逸夫	18	18位	戸沢鉄彦	3	29位	木方庸助	1
4位	桜井精兵	13	18位	三輪彰	3	29位	小泉信三	1
5位	武田憲治	12	22位	馬詰哲郎	2	29位	佐藤弥太郎	1
5位	本田喜代治	12	22位	城戸幡太郎	2	29位	清水幾太郎	1
7位	伊藤日出登	11	22位	四方博	2	29位	下条康磨	1
8位	高木市之助	10	22位	生源寺順	2	29位	関屋竜吉	1
9位	関口勲	8	22位	関口泰	2	29位	高木貞二	1
10位	飯沼竜遠	7	22位	徳岡松雄	2	29位	内藤卯三郎	1
11位	黒沢亮助	6	22位	久松眞一	2	29位	中野効四郎	1
11位	並河功	6	29位	糸魚川祐三郎	1	29位	沼田大学	1
11位	蛭川睦之助	6	29位	牛丸周太郎	1	29位	牧野英一	1
14位	佐藤正典	4	29位	大枝益賢	1	29位	武藤嘉一	1
14位	高橋悌蔵	4	29位	大川周明	1	29位	矢沢亀吉	1
14位	戸刈近太郎	4	29位	岡田要	1	29位	山田竜城	1
14位	吉田喜一	4	29位	奥田彧	1	29位	吉井義次	1

同一得票数の者は名字の50音順に並べた。

元のリストを確定する際の、推薦委員会による投票の様子を示した史料は見つかっていないが、第一回目の意向投票の結果と元のリストに並ぶ顔ぶれには相違がある。

例えば、意向投票では、得票順位2位の近藤金助、4位の桜井精兵、5位の本田喜代治、7位の伊藤日出登、そして9位の関口勲が、いずれも得票数では10位以内に入っていないが予備候補者には選ばれていない。反対に、得票数は3票、順位では18位の岡村精次や、わずか1票しか得られなかった佐藤弥太郎が予備候補者として本選挙に駒を進めている。さらに注目すべきことは、最終的に2代学長となる吉井義次（表2右下）は、この第一回目の意向投票においては辛うじて1票を得るに留まっており、そして推薦委員会もまた、彼を予備候補者には選んでいないことである。

## 自主審査権獲得後の国立大学長選考（その2）

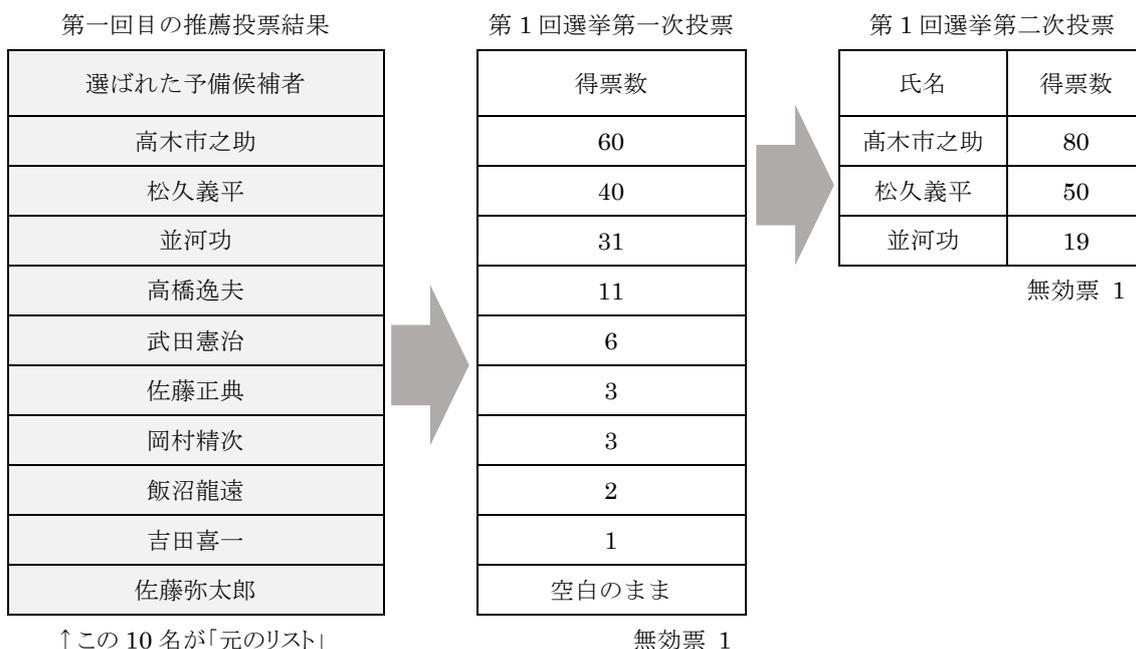


図2 10名の予備候補者（元のリスト）と第1回選挙第一次、第二次投票の結果

### 第1回選挙 第一次投票，第二次投票

第1回目の本選挙，その第一次投票は昭和29年10月18日に実施された。高木市之助が60票を獲得して1位となり，次いで40票の松久義平，31票の並河功が上位3名となった。従って，高木，松久，並河の3名を対象に第二次投票が行われることになった。第二次投票は，同年10月22日に行われた。高木が80票を取って首位となった。2位の松久は50票，3位の並河は19票であった。

よって高木を岐阜大学2代学長の候補者と決定し当人に対して就任を要請したところ，高木から，目下，自身が勤務する愛知県立女子短期大学を4年制大学に昇格させようと奮闘している最中であることから，これを辞退したい旨，返答があったという<sup>4</sup>。

高木から辞退の意向を受けた岐阜大学は，再度の交渉も協議したが<sup>5</sup>，結局は高木の意向を受け入れ再び選挙を行うこととした。ここに第2回選挙の実施が決定したのであった。

## 4. 第2回選挙：武田憲治を選出

### 第2回選挙 第一次投票，第二次投票，第三次投票

第2回選挙は，第1回選挙のために行った意向投票，および推薦投票によって選ばれていた10名の予備候補者，所謂，元のリストを引き継いで用いることで実施された。ただし，先に就任を辞退した高木を除いた9名を対象に行われた。

その第一次投票が行われたのは昭和29年11月22日である。結果は，投票総数144票

(無効票2票を含む)を、松久義平(45票)、武田憲治(42票)、佐藤正典(31票)らが分け合った。第二次投票は、松久、武田、佐藤の3名を対象に同年11月25日に行われた。投票総数は157票であった。ここでも松久がトップ(64票)となり、以下、武田(48票)、佐藤(45票)が続いた。またしても松久が首位に立ったが、彼の得票数が有効投票数の過半数に達していなかったため、同日のうちに松久と武田の上位2名のみを候補とした第三次投票が実施された。第三次投票の結果は、投票総数158票のうち、武田が87票、松久が69票、無効票が2票となり、武田と松久が入れ替わる形となった。これにより第2回選挙は、武田を学長候補者とする事で決着した。

### 武田憲治の辞退

第2回選挙を第三次投票まで行うことで、ようやく武田を学長候補者として選出したが、彼の就任については、選出直後から暗雲が垂れ込めていた。

第三次投票の翌日、すなわち昭和29年11月26日付の『岐阜タイムス』は早々、武田が健康上の理由から就任要請を拒否するのではないかとの見解を述べているのである<sup>6</sup>。同日付の『朝日新聞』は、第三次投票が実施された11月25日のうちに武田に取材を行ったうえで、武田が学長就任要請を辞退したと結論付けて報じている<sup>7</sup>。その記事では、武田が胃潰瘍の手術を受けて自宅で静養中であること、さらに武田の証言として、「この十二日、岐大から二人見え、是非受けてもらいたいとの交渉があった<sup>8</sup>。その話はむろん公的なものとは思っていなかった。この通り健康も許さぬし、千葉で十年にはなるが、まだまだ幾つか仕事が残っているから岐阜の事情がどうであろうともお断りする以外に手はない」と掲載している。つまり武田就任の話は、第三次投票が実施されたその日のうちに消えてしまっていたのであった。

## 5. 第3回選挙：佐藤正典を選出

武田憲治の学長就任が頓挫した岐阜大学は、三度、選挙を行うことを余儀なくされた。その際には、第2回選挙の時と同様に、第1回選挙のために確定させた元のリストに並ぶ10名の予備候補者から、第1回選挙で選んだ高木市之助、および第2回選挙で選んだ武田憲治を除外し、残った8名を投票対象とした。

### 第3回選挙 第一次投票、第二次投票

第3回選挙の第一次投票は、昭和29年12月9日に投開票が行われている。投票総数は158票(白票1、無効票1を含む)であった。これを上位から、佐藤正典(83票)、松久義平(49票)、高橋逸夫(12票)らが分けた。

翌12月10日には、佐藤、松久、高橋の3名を対象に第二次投票が行われた。投票総数は156票(白票1、無効票1を含む)であった。上から順に、佐藤(91票)、松久(47

票）、高橋（16票）と、第一次投票の結果をほぼ追認する形となった。首位であった佐藤の得票数は91票と、有効投票数の過半数を超えていたため、ここで佐藤の当選が確定した。

### 難航した佐藤への就任要請

さて、佐藤の就任について昭和29年12月11日付『岐阜タイムス』は、佐藤からは「かねて内諾を得ているので就任は間違いな」いこと、後は文部省による「発令を待つのみ」であると報じている<sup>9</sup>。加えて同月12日には、岐阜大学から3学部長が西宮市の佐藤宅に出向き、交渉する予定であることも記されており、長く続いた学長選考もこれにて落ち着するかと思われた。

だが、年が明けた昭和30年1月頃から佐藤就任の話は暗礁に乗り上げる。佐藤は当時、大阪府工業奨励館館長の要職にあり、岐阜大学の学長就任については、大阪府側が、「大阪府工業奨励館館長を非常勤として兼職を許されれば就任を承諾する」<sup>10</sup>としていた<sup>11</sup>。岐阜大学はこれに従って大阪府側に佐藤の兼職を認めるよう打診し、それを了承するという回答を得ることができていた<sup>12</sup>。

そこで、高橋悌蔵学長事務取扱と近藤事務局長が文部省大学学術局に出向き、このことを伝えたところ、「大学長の行政上の兼務を行うことは大学運営上好ましくない」との理由により、発令しないと告げられたのである<sup>13</sup>。

以後、昭和30年3月末に至るまでの史料からは、岐阜大学の教職員たちが、佐藤の就任が実現するよう文部省と粘り強く交渉を重ねる様子が記録されている<sup>14</sup>。その過程においては、「東京の有力な大学長」に相談するという手段も講じられていた<sup>15</sup>。

しかし佐藤の学長就任について事態が好転する兆しは見えず、3月31日に開かれた第43回協議会において、遂にこれを断念する運びとなった。

## 6. 仕切り直し選挙（通算4回目の選挙）：吉井義次を選出

この時点までに既に3名の学長候補者を選出しながらも、未だ学長の座を空位のままに置いていた岐阜大学は、またしても選挙の準備に着手せざるを得なかった。

ここで検討事項となったことはその進め方である。それまでの第1回～第3回の選挙ではいずれも、第1回選挙のために行った推薦投票の結果である10名の予備候補者、つまりは元のリストを継続利用してきたが、通算すると4回目となる次の選挙を実施するにあたり、引き続き元のリストを使い続けるか、それとも改めて意向投票と推薦投票を行うことで、新たに予備候補者10名を選び直すべきかが争点となった<sup>16</sup>。そして結論としては後者、つまり意向投票の段階からすべてを仕切り直して行うことにより、新しいリストを作成することを選んだのであった。

## 第二回目の意向投票

仕切り直し選挙のための意向投票，つまり第二回目の意向投票は，昭和30年5月4日に行われた。

『昭和二十九年九月 学長選挙関係書類 庶務課』には，第二回目の意向投票によって推挙された者として53名の名前が記録されている<sup>17</sup>。その結果を表3に示す。この第二回目の意向投票でトップの座に就いたのは，第一回目の意向投票の時と同じく松久義平（37票）であった。因みに，リストアップされた53名のうち，第一回目の意向投票の際にもその名前が挙がっていた者は23名いた<sup>18</sup>。

表3 第二回目の意向投票（昭和30年5月4日実施）の結果

順位	氏名	得票数	順位	氏名	得票数	順位	氏名	得票数
1位	松久義平	37	14位	南大路謙一	3	32位	加藤常賢	1
2位	本田喜代治	22	14位	三輪彰	3	32位	木方庸助	1
3位	高橋悌蔵	20	14位	横山俊平	3	32位	小竹無二雄	1
4位	伊藤日出登	18	14位	吉田喜一	3	32位	酒井正三郎	1
5位	生源寺順	9	23位	内海保次	2	32位	佐々木清綱	1
5位	吉井義次	9	23位	奥田彘	2	32位	志方益三	1
7位	阿藤質	6	23位	佐々木喬	2	32位	清水幾太郎	1
7位	近藤金助	6	23位	佐藤弥太郎	2	32位	田中貞次	1
7位	早坂一郎	6	23位	四方博	2	32位	戸刈近太郎	1
7位	三雲次郎	6	23位	高橋逸夫	2	32位	苔名孝太郎	1
11位	黒沢亮助	5	23位	中島広吉	2	32位	成田時治	1
12位	阿原謙蔵	4	23位	吉田徳次郎	2	32位	野中時雄	1
12位	竹村俊一	4	23位	渡辺侃	2	32位	久松真一	1
14位	飯沼竜遠	3	32位	浅見与七	1	32位	平塚英吉	1
14位	各務虎雄	3	32位	荒木俊馬	1	32位	広浜嘉雄	1
14位	近沢道元	3	32位	石田憲次	1	32位	牧野英一	1
14位	栃内吉彦	3	32位	岡田良知	1	32位	三宅捷	1
14位	蜷川睦之助	3	32位	奥村清久	1			

同一得票数の者は名字の50音順に並べた。

## 第二回目の推薦投票

推薦委員会による推薦投票は5月7日に行われたと見られ，そこで，仕切り直し本選挙の投票対象となる新たな予備候補者10名が，図3に示すとおり選ばれている。これら10名を以後，「新リスト」（図3左側灰色部分）と呼ぶ。この時の推薦投票についても，そ

の得票数など詳細は明らかでない。

新リストに並ぶ 10 名を眺めて注目すべき点は、第二回目の意向投票で 1 位であった松久の名前が見当たらないことである。その理由を示す史料は今回の調査では発見できなかったが、この時点で当人から辞退の申し出があったことを想像する。このほか、第二回目の意向投票では 23 位の内海保次がリスト入りしていることや、逆に 7 位の近藤金助が入っていないことが興味深い。近藤は、第一回目の意向投票の際も、松久に次いで 2 位につけていたが、どちらの推薦投票においても選に漏れているのである。

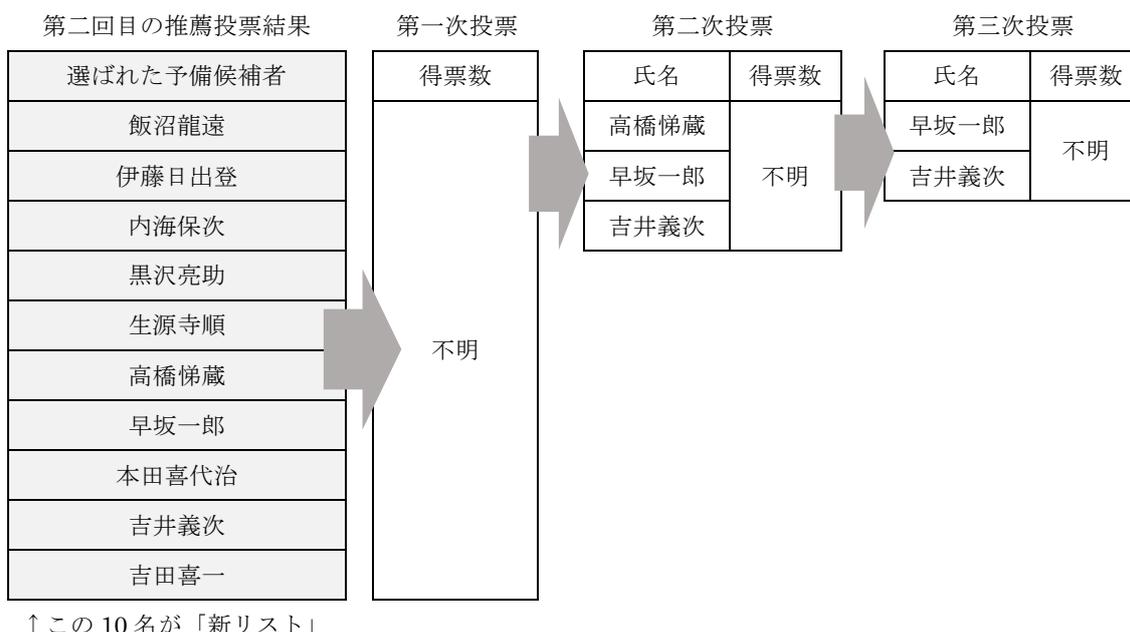


図3 10名の新たな予備候補者と仕切り直し選挙第一次、第二次、第三次投票の結果

### 仕切り直し選挙 第一次、第二次、第三次投票

昭和 30 年 5 月 12 日、10 名の新リストを使った仕切り直し選挙の第一次投票が行われた。この第一次投票の結果については、高橋悌蔵、早坂一郎、吉井義次の 3 名の氏名が、第二次投票へと進む者として 50 音順に記載されているのみであり、それぞれの得票数は明らかでない。

そして第二次投票は 5 月 16 日に行われた。ここで高橋悌蔵が戦列から離れ、早坂一郎と吉井義次の 2 名が第三次投票へと駒を進めることとなった。この第二次投票の結果も、第一次投票の時と同じく、それぞれの得票数は記されていない。それでもこの結果からは、早坂と吉井のいずれかが首位であったこと、しかしその者の得票数は有効投票数の過半数に届いていなかったことが分かる。

そして同日の内の行われた第三次投票により、吉井義次が学長候補者に決まった。第三

次投票の得票数についても、それを示す史料は発見できていない。吉井は、5月20日までに学長就任を引き受ける旨、返答したと見られ、翌月、就任は恙なく実現した。

## 7. 結論

岐阜大学2代学長の選考は、初代学長青木が在任中に死去したため急遽行われた。

意向投票の段階では、助手、事務官、技官からもその声を集めていた。事務官と技官とを合わせた割合は有権者総数の17%近くを占めていた。

選挙結果については、最初に高木市之助を選出したが、本人から辞退の申し出があり再度選挙を行った。そして武田憲治を選んだものの同氏もまた就任を固辞した。そこでさらに選挙を行い佐藤正典が選ばれたが、今度は佐藤の本務先との兼職が問題となって頓挫した。最終的に、一から仕切り直して選挙を実施し、吉井義次が2代学長に就任することとなった。この間、学長不在の状態は1年近く続いた。

幾度も選挙を繰り返すことになった一因は、予備候補者本人に対して事前に学長就任について意思や実現の可能性について問うことなく選挙を進めていくという方法にあった。

吉井は、最初の選挙に先立って行われた意向投票では最下位にいた人物であった。このことは、同じく予備候補者の一人であった松久義平が一貫して高い人気を誇っていたことと対照的であった。吉井が最後に首位に立ったことは、単なる偶然であったとも考えられる一方で、一連の選考過程のどこかで風向きが変わった可能性も否定できない<sup>19</sup>。

これらを踏まえると、個々の大学が自律的にその長を選ぶということは、大学の自治や、それが民主的であるという点において価値を有するが、それは同時に、効率性との間に葛藤を生じさせるということが理解できる。

本研究を終えて生じる新たな課題としては、当時、他の国立大学においては、どのような選考方法を採用し、そして予備候補者にはどのような人物の名前が挙がっていたのかを広範に調査することで、自主審査権獲得前後の国立大学長選考の全容を明らかにすることがある。そのような作業を進めていくことにより、新制国立大学発展期の自治形成プロセスの一端を明らかにすることが可能となるであろう。

### 【注】

- 1) 本年報に収録。
- 2) 学長候補者選定要項によると、学長以下、専任の教授、助教授、講師、助手、事務官、技官を指す。『昭和二十九年九月 学長選挙関係書類 庶務課』の表紙裏の表によれば、有権者全294名のうち事務官は45名、技官は4名である。また、同じ簿冊に収録されている「有権者数調」という昭和30年4月28日時点のデータでは、有権者全298名のうち46名が事務官、4名が技官である。有権者総数に占める事務官と技官の割合の合計

はいずれも約17%となる。

- 3) 『昭和二十九年九月 学長選挙関係書類 庶務課』には表2の内容が「推薦投票結果の得票数」という表題で記されているが、そこでいう「推薦投票」とは本稿において筆者が「第一回目の意向投票」と呼ぶものである。
- 4) 「岐阜大学新学長問題 難航の実態を探る」『東海夕刊』, 昭和29年12月10日。
- 5) 「高木氏に再交渉 岐大学長」『朝日新聞』, 昭和29年11月5日。
- 6) 「武田氏（千葉大学）が当選」『岐阜タイムス』, 昭和29年11月26日。
- 7) 「“健康上お断りした”」『朝日新聞』, 昭和29年11月26日。
- 8) 第1回選挙で選ばれた学長候補者、高木市之助からの辞退が伝えられた第18回協議会（昭和29年11月4日開催）の直後である11月12日に、岐阜大学の人物が既に武田に接触していたことが分かる。
- 9) 「佐藤大阪府工業奨励館長が当選」『岐阜タイムス』, 昭和29年12月11日。
- 10) 「学長問題また暗礁へ」『岐阜タイムス』, 昭和30年1月28日。
- 11) 佐藤の自伝『一科学者の回想』, 286頁によると、佐藤は、岐阜大学学長就任の話があった当時、これに関心はあったが、一方で大阪府工業奨励館を軌道に乗せていく最中でもあり、よって館長在任のまま学長職を引き受けることを望んだとある。
- 12) 「佐藤氏に正式決る」『岐阜タイムス』, 昭和30年1月21日。
- 13) 「学長問題また暗礁へ」『岐阜タイムス』, 昭和30年1月28日。なお、昭和30年1月29日付『岐阜タイムス』の記事「“文部省の了解に全力を”」によると、岐阜大学の中には、文部省のこの見解に意義を唱える声もあった。それはすなわち、大阪府工業奨励館館長という職を研究職ポストであると見做すことで、文部省の主張する行政官の兼務には該当しないとする考え方であった。
- 14) 例えば、「事務局長が更に文部省と交渉すること」、「学長候補者、佐藤正典氏と協議員全員及び事務局長が会見すること」（共に1月31日、第35回協議会）、「来週3学部長、協議員代表及び事務局長が上京することとした」（2月3日、第36回協議会）、「更に高橋学部長及び協議員代表者3人が学長候補者佐藤正典氏に対し更に交渉することとした」（2月10日、第37回協議会）、「手段をつくすこととした」（3月3日、第39回協議会）、「次の協議会までに各学部において対策を考究することとした」（3月11日、第40回協議会）という記述がある。
- 15) 昭和30年3月28日開催第42回協議会の記録（『岐阜大学学報』第45号収録）より。
- 16) 「四度目の選挙準備へ」『朝日新聞』, 昭和30年4月14日。
- 17) 『昭和二十九年九月 学長選挙関係書類 庶務課』には、表3の内容が「推薦候補者投票の結果」という表題で記されているが、そこでいう「推薦候補者投票」とは本稿において筆者が「第二回目の意向投票」と呼ぶものである。
- 18) 最終的に2代学長となる吉井義次もこの内の一人である。また、後に3代学長となる

四方博もこれに含まれる。

- 19) 当時、岐阜大学に勤務していた永田幸雄氏（岐阜大学名誉教授）と池上八郎氏（岐阜大学名誉教授）が証言するところによれば、吉井の弟子筋で岐阜大学教官であった黒田佐俊が、吉井を擁立するよう動いたのではないかという（この説については筆者が池上氏を介して永田氏に質問状を送付し、その返信を池上氏から受け取る方法で確認した）。黒田が、一連の選考過程のどの時点で吉井を推すようになったかによっては、黒田の行動が票の動きに影響を与えたことも考えられる。

#### 【主要参考文献】

- ・加藤陸奥雄（1979）「吉井義次先生を偲ぶ」『日本生態学会誌』第29巻第3号，312～313頁。
- ・佐藤正典（1971）『一科学者の回想』，化学同人。
- ・廣内大輔（2018）「新制国立大学胎動期の学長選考：岐阜大学初代学長青木文一郎の事例」『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』（第4号），69～81頁。
- ・日外アソシエーツ株式会社（2018）『群馬県人物・人材情報リスト2019』，363頁。
- ・『岐阜大学学報』（岐阜大学図書館が製本して所蔵するもの。請求記号377.11 G-16）。
- ・『昭和二十九年九月 学長選挙関係書類 庶務課』。
- ・『昭和二十七年四月 学長選挙関係書類 庶務課』。

#### 【謝辞】

この本研究を実施するうえではたくさんの方からご協力を頂いた。心より感謝する。特に、一次史料の閲覧に協力して下さった岐阜大学職員諸氏，2代学長選出当時の様子を聞かせて下さった岐阜大学名誉教授の永田幸雄先生，同じく岐阜大学名誉教授の池上八郎先生には厚く御礼申し上げる次第である。

**The National University Presidential Selection of 1953-1955 (part 2)  
A Case Study of the Selection of the Second President of  
Gifu University, Yoshiji Yoshii**

Daisuke Hirouchi

Organization for Promotion of Higher Education and Student Support,  
Gifu University

**Abstract**

The purpose of this study is to analyze the process by which the second president of Gifu University was selected. During the process, four elections were held in all because two of the nominees refused to accept their nomination and the appointment of the other nominee aborted for some other reason. They were Ichinosuke Takagi, Kenji Takeda, and Masanori Sato. As a result of this, a gap in governance lasted for about one year. Yoshiji Yoshii, who was eventually appointed, was ranked at the bottom in a poll of all employees conducted prior to the first election. The elections had to be repeated several times, because the elections were conducted without confirming the intentions of the nominees.

Key words: Gifu University, Presidential Selection, Presidents of National Universities, Yoshiji Yoshii